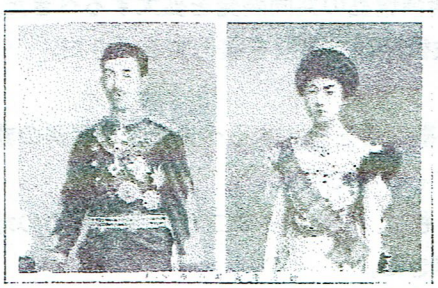
今回の天皇代替わりの特徴と問題点

平　譲二

1　前回，前々回，そのまた前の代替わりをざっくり振り返ってみると

昭和天皇は，前期は軍国日本の象徴（日本軍最高司令官大元帥），中期は戦後復興，経済立国の象徴，後期は経済的に豊かな安定した国の象徴（？）と，歴史の流れに応じて，様々なイメージを発信する存在で，晩年は相撲見物で国技館を訪れる以外，あまり外出や遠方訪問はなく（良子皇后がかなり早めに認知症状が出て人前に出なくなっていた（腰痛のためとごまかしていたが）こともある），亡くなる際には，すい臓がんで長期療養，自粛騒動（にぎやかな楽しそうなイベントはできない，日産セフィーロのコマーシャルの井上陽水の「おげんきですかぁ～」というセリフが消された・・・ｅｔｃ），死亡後の代替わりは，喪に服した状態でのスタート，新天皇即位に伴う祝賀イベントなどは，一年後以降となり，病気療養から足掛け２年くらい，重苦しい空気が漂う代替わりとなった（実は大みそか頃に亡くなっていたのに，死亡日とその発表を１月８日まで極秘に引っ張ったというまことしやかな話も）。・

大正天皇は，即位後，前半は，こわもてイメージの明治天皇からモデルチェンジ（？），富国強兵一本槍ではない文明・文化の香も漂わせる君主として（いわゆる「大正デモクラシー」の時代）ソフトなイメージ（皇后が公式の場によく姿を出し夫婦で国の元首，象徴の役割を務めるようになったのも大正天皇からしい）も出していたようだが，後半は，「ご病気」で，とくに精神面での不調が深刻となり，息子の睦仁皇太子（後の昭和天皇）が摂政となって公的役割を肩代わりし，人目に付かずに療養生活を送り，重苦しい雰囲気を醸し出す君主となってしまった。その死亡後の代替わりは，一応喪に服す中，既に事実上天皇の公的役割を摂政として代行していた昭和天皇が即位し，いまいち新鮮味がない（？）なし崩しの代替わりであった。



明治天皇は，維新政権，洋風の富国強兵政策を報じる新国家の顔として，威厳ある英明な君主というイメージが意図的につくられ（実態は明治政府の実力者であった薩長藩閥政治家と公家らに担がれて神輿に乗っていたパペット（操り人形）に過ぎなかったらしい），その死去は，一つの時代の終り，殉死者が出るような大げさなものであったらしい。

なお，代替わりに関しては，皇太子時代に天皇の役割の予行的な役割を務めたり，次代の天皇の務めの先取り（皇太子参列行事が代替わりで天皇行事に格上げになるなど）をしたりすることも多い。また，結婚して，パートナーとの間に男子をつくるというのも，皇太子の大事な勤めで，これをすることが天皇となる資格取得のように扱われてきた。

2　天皇ビデオメッセージとその是非

明仁天皇が「ビデオメッセージ」でアピールしたこと，その意図は，多岐にわたるが，大まかに整理すると，・公務としての内外の訪問，視察，慰問，慰霊などをすることは，天皇の大事な役割であり，これを果たすにはある程度の肉体的精神的な能力が必要であり，一定以上高齢になると難しいこと，・天皇が病気で重い容体になると，国民生活に好ましくない影響を及ぼすことになるのでそれは避けたいこと（前回代替わりの際の教訓），・自分は既に肉体的に天皇の務めを行うことが難しくなっていること，・摂政を置くというのは権威の重複などとなってよくないこと（大正天皇時代の教訓？），・崩御による代替わりは，喪に服することと新天皇即位行事が重なってやりにくいこと（オリンピックの時期に天皇崩御や深刻な容態となった場合困ることも考慮？），・もろもろを考えると，生前退位，譲位で，代替わりをするのが良いと思うので，速やかによきにはからえというようなことかと私は，理解している。

一部の報道によると，ビデオメッセージ公表にかなり先行して（５年以上前らしい），８．１５の全国戦没者追悼式における式次第を間違えて予定どおりの行動をできなかったことに，明仁天皇は非常にショックを受けたということ（なお，昭和天皇は最後まで頭がしっかりしていたらしいが，その皇后は，年齢相応に重い認知症状が出て，晩年は家族が面会しても誰だかわからず，意味不明な発言を繰り返す

ような状態になり，ごく近しいものが面会する以外，人前には決して出さないようにお世話していたと言われている（そのＤＮＡを半分受け継いでいる）や，新天皇は精力的に内外各地を訪問し，視察，社交，慰問などを行わなければならないという前提で，自分が即位した年齢に徳仁が達するくらいまでに，徳仁を即位させ，即位時に高齢になりすぎないようにしたいという希望が強かったということが言われており，これらが，生前退位を強く求める行動に出た決定打になったともいわれる。そして，宮内庁関係者ほか相談できる人脈と協議し，皇太子家，秋篠宮家とも協議した上，生前譲位を進める方針を決め，政府にも働きかけていたが，政権側の動きが鈍いため，自らが動いて，国民一般にアピールし，事態を動かそうとしたのが，ビデオレターであったらしい。

さて，こういった考えは是認できるであろうか。一つの考えとしては，よいも悪いも，天皇が一定の意思を明確に表示した以上，それを尊いものとして尊重し，実現するしかないではないかという考えで，古い言い方をすると，承詔必謹（しょうしょうひっきん、詔（みことのり）を受けたら必ず謹（つつし）め，天皇の命令を受けたら，つべこべ言わずに，「はいわかりました」と言って，その通りにせよというような意味）である。保守派からリベラル派まで，国会，マスコミ含め，基本的にこのような反応が非常に多かったと私は見ている。このような考え方は現行憲法との整合性がなく，憲法以前に，天皇の意思表示だから一切是非を論じないという立場を私たちは取らないので，このような反応，対応をした層が非常に多かったことに，驚き，失望し，無力を恥じるほかなかった。

もちろん，異なった反応も少数ながらあった。天皇の行動もおかしいが，それをおかしいと言わずに容認する方もなおさらおかしいではないか？大きな間違いだとする立場で，これは，民主主義や憲法的なルールを尊重する私たちと，天皇は存在自体が至って尊いのであり，あちこちに出かけて行ったりできなくなったら，勤めができないので，交替するというのは本末転倒，動けなくなったらじっとして祈っていさえすればよいではないかという一部の右翼勢力の立場である。

図らずも，左派と右派が同じ立場になってしまったのだが，表面的な部分では一致していても，もちろん基となっている思想は全く異なる。私たちは，天皇という世襲の君主が社会的な影響力を持っていること自体が根拠のないこと，有害無益なことであり，否定的に考える立場であり，右派は，天皇を至高の存在と認める前提で，至高の存在にふさわしい役割は何かを論じているのである。

3　今回の代替わりの特徴

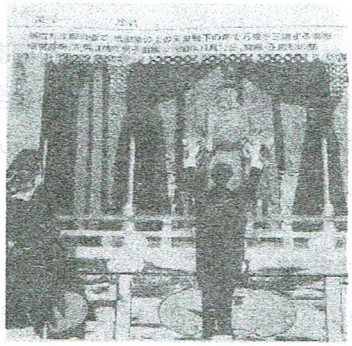
さて，「ショウショウヒッキン」という民主主義，現行憲法否定の時代錯誤的な潮流で，「特例法」が成立し，実現することになってしまった今回の生前譲位代替わりであるが，その特徴はどのような点にあるだろうか。

まず，明治維新後初めての喪に服さない代替わりであるということがある。したがって，新天皇の即位早々にお披露目祝賀イベントを打つことも可能である。

次に，代替わりに伴って，天皇のイメージ戦略に大きなモデルチェンジはおそらくないということが挙げられる（ただし，戦争関係の慰霊の旅はほぼ完了したことになっているので，今後は比重が落ちるであろう。）。これは，明仁天皇ビデオレターの趣旨の大きな眼目である天皇は明仁天皇がしていたように視察，慰霊，慰問などいろいろなことを行うべきであるということを受けての譲位であるから，新天皇がその趣旨に反したスタイルを取ることは非常に考えにくいということである。なお，明仁天皇の視察，慰問，慰霊訪問のスタイル（国民目線で親しく優しく・・・）については，美智子皇后の考え，好み，キャラがかなり入っているらしく，明仁天皇が衰えにより退位しても，しばらく美智子皇后の影響力が続くかもしれない（雅子妃が皇后のスタイルを習得するため特訓中という報道が女性誌などで繰り返し報じられている。）。

さらに，代替わりの時期がかなり前に決まっているため，代替わりに伴う各種の儀式，イベントなどについて，準備期間が十分とれるということがある。

なお，前回の代替わりに関連して，批判，異議が出された点は気にしながら，儀式，イベントは企画されそうである。皇室，宮内庁サイドが気にしているのは，予算，費用を抑制する，公的な行事・儀式においては，神道方式をできるだけ省き，また，憲法との整合性を考慮する（神道の定める式次第のこ



とはプライベートなものにする，三権の長があからさまに臣下の礼をとることはやめるなど)，・過剰警備は避け，一般市民の生活に過度に影響しないようにすることなど，らしい（明治以降の３代にわたる代替わりの教訓，反省を踏まえて，異議が出しにくい代替わりを考えている模様)。

4　今回の代替わりの問題点

まずは，明仁天皇美智子皇后象徴天皇制（善人を装ってあちこち出没して実は政治的な思惑を秘めた行為をして，権力と結託しつつ，皇室の安泰を図る）の承継としての生前譲位による代替わりであるので，その問題点全般が問題となる。

退位特例法の制定過程で見られた白昼堂々の憲法規範無視の強行劇が再現されない保証は全くない。君が代・日の丸の強制による思想良心の自由への圧迫，天皇元首化の既成事実化，国家神道が公的な地位を築く懸念が大きい。

もちろん，膨大な国の予算が無駄に使われることも仕方がないものとあきらめてはいけない。また，精力的に活動できそうな新天皇の行動により，沖縄基地問題，福島の被ばく問題などについて，天皇が関係地域を訪問などすることにより，権力寄りの見解が強化され，抵抗する民衆が弾圧される環境が作られる懸念も強い。　　つづく（多分）

「代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク」参加賛同の呼びかけ

来年春には天皇が代替わりすることになっています。退位日が 2019 年 4 月 30 日、同年 5 月 1 日が新天皇即位と決められました。「退位特例法」による生前退位に伴う代替わりであり、近代天皇制史上初めての出来事です。

天皇制は、戦前、アジア太平洋諸国の侵略・植民地支配のための政治体制でした。昭和天皇は、戦前の大日本帝国の政治上、軍事上の最高責任者でありながら、合衆国の占領政策の都合などにより戦争責任をほとんど全く問われないままに、戦後も引き続いて天皇の地位にあり、その死亡による代替わりに際しては、戦争責任問題の議論も相当に広く行われました。また、天皇の死亡に伴う代替わりが、国民、一般市民の生活に及ぼした影響についても、過度の「自粛」などを巡って議論されました。しかし、現天皇に関しては，「護憲派」であり、「平和主義者」であり、第二次世界大戦の日本が関係する戦地、戦場にも、大規模災害の現場や避難者の下にも、実にしばしば巡り歩いて慰霊、慰問の旅を重ねてきました。「国民」のために「祈り」と「癒し」に努めているなどという印象を持っている人が多く、天皇制が社会や私たちの意識に様々な影響を与えることについての問題意識は薄らいでいると思われます。

しかし、憲法に制度として残り続けた「天皇制」がもたらす影響を過去のものとしてではなく、多様な視点から問い続ける必要があると考えます。私たちが共有する平和、民主主義、多様性尊重、信教・良心の自由、政治的社会的文化的マイノリティの権利尊重などの価値観が、天皇制がはらむ国家主義、軍事主義、家父長制、国家神道などの関係を明らかにする必要があるのではないでしょうか。

天皇と天皇制のあり方を決めるのは「主権の存する日本国民の総意に基く。」とされていますが、現実は、天皇制に対する開かれた議論はタブーになっていると言わざるを得ません。天皇の代替わりに際して、天皇の権威、政治的影響力が強いことに恐れて、「忖度」して、何も言わないことは、きっと、後々後悔することになるのではないでしょうか。

来る最後の１２月２３日の天皇誕生日には、森英樹さんを講師に天皇代替わりと私たちの守りたいものについて討論する集会を行います。そして、来年の２月、４月、５月以降 11 月の大嘗祭までの期間、「代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク」として運動を進めていきます。

代替わりの今こそ、タブーのままに過ごすのではなく、天皇制について自由に論じることが必要だと考えます。まずは、広く同じ関心を有する人と、意見を交換し、意見や見解の相違を認め合いながら、ともに行動する機会にしましょう。代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク」への参加・賛同をお願いします。

連絡先：090-6468-5556